

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 「70分をどう使うかは自由です」などと言われても踊ったりしてはいけません。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に32の問い(1-32)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があったらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

二つの現実

I

「宗教の現実について解説者の間に一致点があるとすれば、超自然的存在が現代世界から姿を消したということであろう。」これは、宗教の領域の現実のみならず、日常世界の社会的現実を、現象学的人間学の視点から解明している社会学者ピーター・バーガーがある著書の冒頭で述べた言葉である。超自然的世界の現実感覚が極度に衰退した、あるいは消滅した現代の諸文化はますます「感覚的」なものとなり続けるとも指摘されている。この場合、「感覚的」とは、経験的、現世的、世俗的、実用的、享樂的などの意味をもつ。現代は、このような感覚的把握から成る日常的な現実観が支配的な世界である。そこでは、「超自然」は、もはや、もう一つ別の現実ではなく、端的に非現実である。

ところで、バーガーの立場がそうであるが、神と神によって創造された世界との区別が明確なユダヤ教やキリスト教の思想を背景とする西欧においては、この現状を聖と俗の領域の分断、そして俗の領域の自律化という「世俗化」の視角から明確に把握することが可能である。だが、日本の場合はどうであろうか。日本人は、例えば、近代科学技術の粋を集めて生産された自動車の品質を誇りとしながら、そのボンネットを開けて神官に災厄よけの御祓をしてもらうことに何の不自然さも感じない。つまり日本人は、一方では神と自然、聖と俗の違いを自覚的に反省することもせず、伝統的にアニミズム的な呪術的慣習を保持し、同時に、本来日常的な生活感覚を中心とした現世主義者であって、科学技術など近代西欧の世俗的恩恵をもっぱら享受する実用性、日常性に埋没している。自らの日常性をあえて対象化し、問い、疑うという日常を超えた視点をわれわれ日本人はもち合わせていないのではないだろうか。そしてそのことが、われわれが拠って生きるべき真の現実とは何かということを考える時、われわれの理解を貧困で偏狭なものに限定しているのではないだろうか。

ともあれ、われわれは日常的な現実というものがそもそもどのように成立するのか、そしてどのような現実の性格と限界とはいかなるものかを反省し、日常を超えた宗教的あるいは超自然的現実があるとすれば、それが日常的現実とどのように関係するのかを考察し、真の現実を発見する道を模索してみたい。

II

最初に、日常生活における現実的なものとは何かということについて、まず冒頭で触れたピーター・バーガーおよび共著者トマス・ルックマンの興味深い所説を概観しながら考えてみよう。

バーガーとルックマンの分析を結論的にまとめてみると、人間世界の現実とは、所与の「自然」とは異なり、社会的集団としての人間が、自らに意味秩序を供する存在として作り出した人間の営みの所産なのである。したがって、現実というものを考える時、それがいかに個人を超越し、個人や集団に対峙する客観性を獲得したものであっても、依然とし

てそれは人間が作り出し、人間の行為によって作り変えられることができるものであるという人間主義的な視角を忘れてはならない。

バーガーとルックマンによれば、人間の世界構築の営みは人間の生物学的体質からも必然の行動であって、なにか二次的で余計なものではない。

犬や馬など他の動物はその本能的な仕組みによってあらかじめ決定された閉じられた環境世界の中に生きる。馬には馬の世界、^{ねずみ}鼠には鼠の世界が固定されている。ところが人間には、生理学的限界はもちろんあるにしても、他の動物のように本能的な仕組みが発達していないためなのか、その本能的な行動様式があまり特定されていない。だからそれによって厳密に特定され、前もって決定された人間の世界というようなものは無い。つまり、他の動物とは違って、人間にとって世界は開かれたものであり、人間が自分自身の営みで作り出さなければならないものである。

以上のことを言い換えると、まず人間の身体には人間の行動に安定性をもたらすために必要な生物学的資質が欠けているということである。もしこうした条件のもとで他の動物と同じように存在しなければならなかったとしたら、人間は無秩序と不安定性の中で自己を見失うことになる。次にこのように不特定性と不安定性を生物学的特質とする人間は、生活上の確かな秩序と安定性と方向を、不断の行動において、たえず自分の外に構築し続けなければならないということである。その過程は、自分に意味を与え、秩序と安定性を供給する人間の世界を作り出す過程でもある。つまり、人間は生きるために世界を作り出さなければならないが、またその世界の中でのみ安定した人生を実現することができるのである。しかも、人間は生れた当初は身体的にも人格的にも未完成のままであるが、その自分を成長させ完成させるのは、自分の世界を構築していくその同じ過程にほかならない。バーガーの表現に従えば、自分が構築する「世界の中に自分を作り出す」のである。

人間の世界は人間の所産である。しかし、それはわれわれから独立して存在し、時には個人の意に反して、否定し難い所与の客観的現実として経験される。一体これはどういうことなのであろうか。

バーガーとルックマンはこの変容を社会的客体化の現象として解明する。客体化のプロセスとは、個々の意識主観の外部に向かう活動が相互に作用しあい、それが特定の集団のすべての成員によって意味あるものと認められ、一定の型や様式において共有され、通用するようになる過程であると言えよう。このように客体化された行為がさらに第三者によって継承される時点に達した時、個人の存在に先だって、それ自体として存在する客観的な社会的現実という性格が固定化されることになる。こうして人間の営みは、個人が否定しても現実性を失わず、個人が本意であってもその強制力を行使する客観的現実の地位を達成する。例えば、政治制度は人間が自発的に考案するものであるが、それが制度として社会的に固定されると、もはや個人の自由にはならない客観性をもつようになる。また、人間の行動が一つの社会的役割として固定される場合にも同様のことが言える。裁判官の役割は、ある個人が彼自身の意図によって判決を下すというのではなく、裁判官という社

会的役割を担う者として判決を下すのである。さらに、個人の主観が客観的現実性を獲得した模範的な事例として言語を挙げることができる。以上のいくつかの実例から明らかのように、われわれの日常世界を構成するすべての諸要素は、こうした客観性をもつのである。

個人が客観化された現実に対して自発的に従う時、この現実の主観的現実と呼ぶことができる。それゆえ、人間の世界構築という全体像を正しく理解するためには、客観的現実が同時に主観的現実となるように、個人がこの現実を再占有する内在化の契機を考慮しなければならない。この内在化とは、個人の意識構造の社会化にほかならない。そしてその社会化は当の個人だけでなく、他の人々とともに認めることができるものでなければならない。人間が社会の産物であると言われることの内実もこの内在化に基づく。ここで大切なことは、個人が世界を自分のものにすることが、自分にとって重要な他者との対話を通じてだということである。その場合、個人にとっての世界とは、対話相手たる他者自身の社会的位置および人生経験にしたがって、修正され、限定された世界の具体的な側面のことである。この人間の社会化は当然個人の生涯を通じて継続し、しかも完結することがない。

上に述べたように、現実とは人間の働きと別に成立しているものではない。それでは、この現実はどうのように維持され続けるのであろうか。バーガーとルックマンによれば、客観的現実とは、それが作り出される時と同様に、個人が所属する社会集団が集合的に共通する認識をもち続けることによって維持されていく。また主観的現実も重要な他者との対話の継続という細糸によって辛うじて維持されるという。

III

以上、日常世界の現実とは人間によって社会的に構成されたものであるとするバーガーとルックマンの分析結果を概観したが、われわれによって自明と受け取られている安定した日常生活の現実が、実はそれ自体としては、極めて人間的な営みによって作り出され、支えられている不安定で相対的なものでしかないことが分かる。つぎに、かれらの分析に即して、このような日常的現実の性格を、またその限界を特に宗教的あるいは超自然的な世界と現実との関係に注目して考えてみよう。

われわれの世界は多数の現実で成り立っている。一つの現実からまったく別の現実へ移ると、われわれはショックを経験する。例えば、人がそれまで当り前のことと受け止めてきたルーティーン的生活から脱却し、神に帰依する行為を信仰による「飛躍」という表現で語る宗教がある。ここでは日常的現実以上の現実が経験されている。ところが一般には、日常的現実とは、驚き、脅威、緊張から解放された常態的なことのゆえに、多くの現実の中でも、最も確かで否定しがたい現実とされている。それは、すべてが当り前で自明のこととして受け止められる秩序のある安定した世界、平凡なルーティーンの自然態の現実である。それはまた夢のように一人だけの世界ではなく、他者によっても同じように肯定されるものでなければならぬし、空間や時間の構造にも当然対応し、なかでも時間の流れに

逆らうことはありえない世界である。日常生活における言語は普段の生活をスムーズに成り立たせる実用的な情報の伝達に用いられ、そこでの知識はルーティーンを遂行するのに役立つ性格のものが支配的である。

このように、日常的現実とは自明性と身近な実用性と有意味性を性格としており、日常的現実から疎遠で非実用的な諸現実を含むこの世界の全体は、必然的に不確かで不透明なものとして現実の外に放置される。もちろん、夢とか遊びとか信仰の世界にしても、最もリアルな日常の現実により、その部分領域として位置づけられ、日常の現実にとっての意味の解釈の対象として関連づけられる場合もある。しかしその場合には、日常生活とこれらの非日常的限定領域との彷徨は「跳躍」とか「頭の切り替え」という使い分けの形で経験され、日常世界の至高の現実性は保たれ、いつでもその日常的現実に戻ることが前提されている。

もし日常生活の現実が、以上のように、自明とされる透明な昼の世界に集中するものであるとしたら、それは実は広大な混沌の世界の中のほんの小さな開拓地にすぎず、その背後には常に昼の光りの影になっている暗闇の部分が広がっているということができるであろう。したがって、日常の現実が当り前のリアルな世界であることを正当化するためには、日常の現実とともに、それとは異なる非日常的な諸々の現実をも現実としてその中に包括し、しかも日常の現実とその他の領域をそれぞれ秩序づけ、それぞれに意味を付与し、統合することができる世界観あるいは宇宙観がなければならない。そしてこうした見方は、日常世界が排除している緊張や謎を含む象徴的世界において可能になると言えよう。もちろん、この象徴的世界も当然その社会集団の成員のすべてに妥当なものとして共有されているものでなければならず、長い歴史過程を通して客体化され、人々の意識に沈殿し蓄積されることによって確立されるものである。その最も古い形態が神話である。そして宗教というものは、人間を超越しながら人間に関わり、人間の日常生活より広い、謎と危機と緊張をはらむ現実には眼を開かせ、しかもこの現実の中で神聖な秩序に出会うことを可能にする営みであるとも言えよう。

したがって、特定の社会集団の中で象徴的世界の現実感覚が失われる時、日常生活の昼の部分だけが秩序づけられた意味ある世界であると思われられるようになる。日常生活の中心から遠く離れた周辺地帯、すなわちマージナルな事柄、例えば人間の限界状況である死などは、日常的には困ったことではあるが、考えてもしかたがないこととなり、真剣な考察から排除されることになる。ところがその時、実は日常の現実とは暗闇の部分による脅かしにさらされることになる。人間の限界状況が現実の事態となる時、日常世界内での秩序や規範の基本的な諸前提が大きく脅かされる。日常の現実とは幻想にすぎないのではないかという疑いに直面し、さらには日常生活の営みが無秩序と無意味の混沌の世界に呑み込まれて崩壊してしまう脅威にさらされることになる。象徴的世界が現実性を回復すれば、象徴的世界は周辺的事物に固有の現実性をありありと示し、それらに正当な位置と意味を与えることができるのであるが。

世俗化とは、まさにこのよう象徴的世界構築の営みの放棄を意味する。現代の世俗化の世界における人間の真の姿は、人間であることの意味を付与する秩序規範が崩壊の危機に脅かされている宇宙の小さな片隅をさ迷っているようなものであるとも言えよう。言い換えれば、世俗化された世界の人間は、身近で実用的功利的な日常世界の昼の部分だけに辛うじてすがっている哀れな存在である。この秩序規範の崩壊による意味喪失の危機に目覚め、昼の部分だけでなく暗闇の部分をも意味づけることができる現実意識を深化し構造化することが、われわれにとって大切な課題なのである。

以上少し長くなってしまったが、われわれは現実ということについて根本から考え直してみた。その意図は、われわれが当り前のこととしている日常的な現実感覚を人間の世界構築の営みの全体的文脈の中で構造的に見直し、相対化して、その位置を確認することであった。われわれにとって、日常はあまりに身近で实际的であるがゆえに、それに対して必要な展望をもつことが困難だからである。われわれはあるがままの日常性に無批判に埋没してしまい、見るべき現実を見ないままにいる場合が多い。

IV

それでは、どうしたら日常性を批判的に捉え、われわれの現実感覚を深化することができるのだろうか。まず、われわれの日常性の問題と日常性からの解放ということについて考えてみよう。

日常的現実の性格については前節で見た通り、その際立った特徴はすべてが当り前の自然態として受け止められる点にある。作家の大江健三郎氏は日常性の問題を「自動化作用」の問題として指摘している。驚異や緊張から解放されて安定した日常の自然態あるいは常態は、無意識的で反射的な動作反応を生み出す。事物は意識にのぼることもなく自動的に知覚される。日常的な生活のくりかえしの中で、反応作用が自動化してしまってその見るべき実態によく眼をすえて見るものがなくなってしまう。日常生活の実際の場でこのように意識にとどめられずに過ぎ去ったものは、思い出そうとしても思い出せず、もともと存在しなかったのと同然だとも言われる。

前節でわれわれは、日常的現実の性格として日常生活の中心地帯とそれを脅かすような周辺地帯、マージナルな事柄を区別した。そしてマージナルな現実是不透明なまま背後の暗闇の世界に放置されるということに触れたが、これも日常性が含む問題であろう。ピーター・バーガーも別の著書でこの問題を指摘しているが、彼の表現を借りれば、それは「軽薄性の勝利」にほかならず、満腹してまどろみながら、ものうげに昼食を消化している中年の実業家の現実と同様である。これでは人間は真の全体的状況は分からない。例えば、大江氏も日本の文化の中央指向を批判し、中央の視角からでなく、周辺の現実の視角からそれを見ることをしないと日本全体が見えないと語っているが、これは日本に限られる問題ではなく、一般に日常性の感覚に潜む問題、つまり日常の中心地帯を周辺から切り離し、人間の限界状況がそこで問題となる周辺地帯を無視し否定するようなあり方と言える。

しかし、当り前のことの共有こそが日常性なのであるから、日常性の拘束力から解放されて、自由で覚醒された精神で現実を見直すためには、今まで当り前のこととみなしてきたことをわれわれの意識の対象にしなければならない。

V

ところが、意識というものはそれ自体で機能するものではない。大江健三郎氏はこのことを次のように的確に述べている。「言葉なしで、意識が真に考えることはできない。意識は言葉に出会ってはじめて、明瞭に考えはじめる」(『小説の方法』、1頁)。意識が意識として作動するには言葉が必要なのである。後に取り上げるポール・リクールも、言葉の媒介なくしては空疎な沈黙が残るだけだと考える。しかし、その言葉もいわゆる日常・実用の言葉では、この場合は役に立たない。単にルーティーンを遂行するだけであれば、単語や文章をおしまいまで聞いたり、言い切らなくても伝達したいことが伝わりさえすればよい。この種の言葉は、現実生活の中でやはり自動化され、反射化されて日常性の一部を構成するにすぎない。大江氏によれば、それはもう一つの言葉、すなわち、意識に「もの」としての実体感を与えるような手ごたえある、かたちをそなえた詩的言語でなければならない。大江氏はロシア・フォルマリストの「異化」の方法に注目する。グロテスク・リアリズム、道化、誇大、^{わいけい}歪形、奇形、その他を媒介として、ものを自動化の状態から引き出す「異化」という方法によって、日常・実用の言葉がかたちをもった文学的表現の言葉になるのである。これが自動化作用をこうむっている日常生活への強い揺さぶりになるという。

この文学的表現の言葉こそが日常性に没しているわれわれの想像力を喚起し活性化させ、毎日眼にしながらか見えていない現実をはっきり捉えるようにすると考えられる。ただしこの場合、想像力とは慣れ親しんだ通常の知覚や感覚の単なる延長線上にイメージを形成する能力のことではないことに注意する必要がある。大江氏が紹介しているガストン・バシユールの想像力の定義によれば、「……想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけても基本的イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ。イメージの変化、イメージの思いがけない結合がなければ、想像力はなく、想像するという行動はない。もしも眼前にある或るイメージがそこにはないイメージを考えさせなければ、もしもきっかけとなる或るイメージが逃れてゆく^{おびただ}夥しいイメージを、イメージの爆発を決定しなければ、想像力はない……」(前掲書、82頁)。

言うまでもなく、われわれの関心は直接文学論にあるのではない。しかし、文学の力が日常性の自動化作用によって見えなくなっている現実をはっきり捉えることにあるのであれば、文学の方法論を十分に考慮することが、われわれの課題遂行にとって重要である。

VI

それゆえ、文学の方法論を考慮しつつ、最後に言葉による象徴的世界の構築の具体例として聖書を取り上げてみよう。その際、聖書の言葉の問題に視座をおいた研究を展開しているポール・リクールの見解を参考にする。

リクールによれば、聖書は日常的な現実を指示する日常言語ではなく、それとは何らかの距離を置く現実を指示する詩的また虚構的文学的言語による作品である。

そこで、具体的な例を、よく知られているイエスの語った「たとえ」から見てみよう。イエスは、将来に期待されていた神の国の現実が自分とともに始まったと自覚して、神の国の福音を、しばしばたとえを用いて宣べ伝えた。イエスのたとえの素材は、誰にでも馴染のある日常の生活の匂いのするものや、人々に周知の伝統的なユダヤ教の教えなどから取られたものである。にもかかわらず、イエスのたとえはその物語の筋のもつ法外性によって特徴づけられている。例えば、^{ぶどう}葡萄園で働く日雇い労働者のたとえがそうである。限られた収穫時に大勢の労働者を必要とする葡萄園の主人が、仕事を求めて集まっている人々のところへ行き、労働者を雇う。朝一番に雇われた労働者は、仕事にありつけたことに安堵し喜んだであろう。他方、夕方五時頃になってもまだそこに立っている人々がいた。かれらは明らかに仕事を得られなかった失業者である。ところが、葡萄園の主人はかれらを雇ったばかりでなく、夕方一時間程しか働かなかったかれらにも、朝早くから十時間以上も働いた労働者たちと全く同額の報酬を支払ったという。これは全く非常識なことであり、日常的には納得できない出来事である。実際、朝から一日中働いた労働者はこのことに承服できず、主人に不平を洩らす。しかし主人は朝から仕事に就くことができた労働者の不平を激しく退けたのである。これがイエスの語ったたとえである。しかし、果たしてこんな雇用者が世の中に存在するであろうか。

つぎに盛大な宴会のたとえを取り上げてみよう。このたとえについても同様なことが言える。ある人が盛大な宴会を催して、大勢の人を招待した。ところが宴会の時刻になって、招待を受けていた人々が一様に来られないと断わった。すると主人は怒って下僕に命令して、すぐに町の広場や路地へ行って、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人を連れてこさせたのである。このようにイエスは語ったが、宴会に招待しようとした客に断わられたとあって、果たして町の大通りで見知らぬ人間を代わりに招く主人がいるであろうか。これらは、日常の現実では考えられない法外なことである。物語の素材はありふれた日常的なものであっても、その物語のイメージは現実にはありえない虚構である。

まだほかにも興味深いたとえがある。ある人が種を蒔いたが、蒔いた種が、三十倍、六十倍、百倍の実を結んだという。また小さな一粒のからし種が大きく成長して、鳥が宿るほどの木になったという。これらのたとえも神の国の現実を指し示すものであるが、これらのたとえにおいても明らかに日常生活の感覚から逸脱した誇張されたイメージが展開されている。

このように多くのたとは、法外性、誇張、逸脱などリクールが境界表現と呼ぶ方法を用いた虚構への迂回によって、物語の場面とわれわれの日常生活の経験的現実との間に緊張を引き起こすのであり、日常的理解では想像を絶するものである。これらのたを讀むために、読者は慣れ親しんできた自己の物の見方を仮想的に変えてみなければならない。ここで要請されているものは、日常の現実の中で確認できない事態を可能態として発見するように自らを将来へと開き、新しい現実へ解放する想像力である。例えば先の葡萄園のたとは、確立された日常の世界の合理的な時間の秩序や労働報酬の配分という公平な労働評価を揺さぶり覆すような新しい事態をわれわれに開示する。夕方になっても仕事がない失業者の存在は切り捨てられるべきマージナルな弱者であるのに、その人が一日生活するのに必要な賃金が支払われる。神の支配の現実とはそのようなものだと言うのである。このたとは、確立された日常の公平感覚を超えて、一人の人を認めることの意味をわれわれに突き付ける。イエスのたとは、実に招かれる資格のない罪人が招かれ、希望を持つにはあまりにも小さなものでしかないものに大きな未来を約束する神の支配の現実を描く。

このような聖書的言語は、リクールが指摘するように、まず人間の想像力自体に訴え、想像力の転換を要請しているのである。また日常の現実を乗り越えた新しい超自然的、超越的現実の可能性が自分の前に開示されるためには、想像力を喚起し活性化する言葉が必要である。むろん、こうした言葉がキリスト教にのみ見られるのではないことは当然である。しかしイエスのたが、宗教の言葉のもつ象徴的世界を確立する働きを端的に示しているのも事実である。それは唯一の神のみを神とし、日常世界をも含めてすべての事物を神の被造物として徹底的に相対化するものである。だからこそ、イエスのたの法外性は次のような働きをなしていると理解されねばならない。日常性によって切り捨てられているマージナルな事柄、例えば人間の罪性、苦しみ、弱さ、絶望、死などの限界状況が現実的なものとして直視され、これらの絶望的な人間のあり方は神の愛と救済の意志の対象とされる。さらにまた、こうしたことを通じて日常の現実には新しい意味が与えられるのである。そのような想像力を喚起する超自然的現実が確立されることによって、日常の現実も豊かな意味秩序の中に真の現実として現われるのである。

次の問題(1-32)には、それぞれa, b, c, d, eの答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d, eのなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたるa, b, c, d, eのいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

I.以下の問い(1-22)に答えなさい。

1. 現代の日常の現実観は「感覚的把握」から成るという傾向が指摘されているが、これを一語で言い換えると、現代のものの捉え方がいっそう()になることを意味する。
 - a. 非合理的
 - b. 非科学的
 - c. 利己的
 - d. 刹那的
 - e. 直接的

2. 日常的現実が最もリアルな現実として現われる理由は()からである。
 - a. 人間自らが作り出す秩序と安定性をもつ
 - b. 客観的現実が意識に内在化される
 - c. それが決して自然でなく、自然的ですらない
 - d. 近代科学技術も災厄よけに打ち勝つことができない
 - e. 人間の生物学的資質すら、それに従わねばならない

3. 個人の主観が客観的現実性を獲得した模範的な事例として「言語」を挙げることができるが、その説明として不適當なものは()というものである。
 - a. 言語の諸法則は客観的に与えられており、個人が勝手にそれを変えることはできない
 - b. 個別の言語はすべて人間の創意と想像力と長い歴史の成果である
 - c. 言語は集合的に認められたものであるという理由で客観的にリアルである
 - d. 言語が人間の所産であることを否定できる者はいない
 - e. 個別の言語の発達を説明するには、所与の自然の法則を発見する必要がある

4. 人間にとって世界は開かれたものである、との命題に反する記述は()ことである。
- a. 人間にとって世界は生物学的には特定されていないが、社会的には規定されている
 - b. 人間は、他の動物に比べて計り知れないほど環境に柔軟に反応できる
 - c. 人間も強い性的衝動をもっているが、性行動のパターンは文化的に無限に多様である
 - d. 人間の生物学的な本能的欲求は、特定の方向性をもって行動を規定する
 - e. 人間はある場所では遊牧生活を維持し続け、他の場所では農耕生活に移行する
5. 「昼の部分だけでなく暗闇の部分をも意味づけることができる現実意識を深化し構造化することが、われわれにとって大切な課題なのである。」この意味を言い換えると、()ということである。
- a. 日常の生活をこそ軽く見て、死という否定的な限界状況をこそ深く経験しなければならない
 - b. 現実意識がマージナルな事態に脅かされるままであってはならず、最もリアルな現実の意識を強化しなくてはならない
 - c. 言語によって日常の現実を超え出ることができるように、象徴的な世界を描き出す努力をしなくてはならない
 - d. 死を無視するのではなくそれをも人間の経験の周辺的な一部として意味づけることができる現実観をもつようにしなければならない
 - e. 日常生活が無秩序と無意味の混沌の世界に呑み込まれて崩壊している現実をこそ直視するようにしなければならない
6. 日常的現実の特徴として自然態ということが言われているが、それは()を意味する。
- a. 何事に対しても動揺しないで、平常心を保った状態
 - b. 所与の自然界の法則に調和した状態
 - c. すべてが自明で特に変哲もない安定した状態
 - d. 科学的精神に基づいて構築された合理的な日常性
 - e. 意味喪失の危機が存在しない日常性
7. この論文の筆者は言葉の重要な役割を()に見ている。
- a. 意識が物事を考えるための不可欠の手段
 - b. 普段の生活を活性化する情報の伝達
 - c. 想像力の歪形の作用による現実の否定
 - d. 沈黙を避け、重要な他者との対話の手段
 - e. 誇張、逸脱などによる新しい現実の開示

8. 想像力とは()のことである。
- a. 完成されたイメージを形成する能力
 - b. 誰もが当然同定することができる明確なイメージを描き出す力
 - c. 眼前にない新しさへ向かって、精神を投げ込む力
 - d. 静的な夥しいイメージを理解し納得する能力
 - e. 絢爛たるイメージを抽出する能力
9. 人間の現実構築の営みが客観的現実として確立し、固定化されるのは()である。
- a. 不本意であっても個人がそれに従わざるを得なくなる時
 - b. 安定と秩序の内に人間世界が構築される時
 - c. 問題のない常態的な世界が成立する時
 - d. 長い歴史を経過して、現実世界が意識に蓄積される時
 - e. 客体化された行為が第三者に継承されることが可能となる時
10. 次の事柄のうち、人間世界の現実ではあるが、日常性にのみ固有であると言うことができないものは()である。
- a. 無意識的で反射的な動作反応
 - b. 実用的なものに埋没する態度
 - c. 秩序と安定性である超越的現実
 - d. 社会集団のすべての成員による共有
 - e. 超自然に対立する自然
11. 詩的言語とは、()を意味する。
- a. 日常生活に必要な情報を伝達する言語とは全く無縁な言語
 - b. 事実でないことを、事実のようにイメージさせる言語
 - c. 通常の実験とは異なる事態を想像する力を活性化させる言語
 - d. 非合理的直感に訴えることによって想像力を喚起する言語
 - e. 自動化を妨げ、基本的なイメージを次々に言い換える言語
12. この論文が言わんとしている中心的な論点は()ということである。
- a. 日常の現実を反省することは困難であるが、それを相対化する道として言語による象徴的世界の構築ということが考えられる
 - b. 日常の自動化した現実、ルーティーンから自らを解き放つには、想像力を豊かにして、主観的イメージに生きなくてはならない
 - c. 日本では聖と俗という区別も確立しておらず、世俗化も進んでいないが、それだけ日常性を自覚的に反省することは困難である
 - d. 聖書は、人間の想像力に訴え、想像力の転換、日常現実の乗り越えを目指しており、

そこに異化の文学的な効果が見出される

- e. 人間の現実とは自然と異なり、人間自身の世界構築の所産であり、日常生活のリアルな現実といえども人間によって変えられるものである
13. 資料 p.4 にある「日常の現実が当り前のリアルな世界であることを正当化するためには……」で用いられている「正当化」とは、日常の現実を（ ）することを意味する。
- a. 意識化
 - b. 位置づけ
 - c. 構築
 - d. 直視
 - e. 絶対化
14. 日本人の実用性、日常性への埋没とならんで、アニミズム的な呪術的慣習が指摘されている。この慣習は（ ）をその基本的特色とする。
- a. 日常を超えた視点を提供していないこと
 - b. 俗の領域が自律化していること
 - c. 聖の領域が俗のそれと緊張関係にあること
 - d. 近代科学技術が享受、礼賛されること
 - e. 聖の領域に俗のそれが侵入していること
15. ドストエフスキーは自らのシベリア流刑地での囚人生活の体験に基づいて、「人間はいかなることにも慣れる動物である」という定義を人間の最上の定義としている。この定義の内容は、資料に述べられた（ ）ということと等しい。
- a. われわれは一つの現実から他の現実へ移るとき一時的にショックを経験する
 - b. 人間知識がルーティーンを遂行するための処理能力をもっている
 - c. 驚異や緊張から解放された安定した常態は常に無意識的に反応する
 - d. 日常世界の至高の現実性が保たれ、いつでも日常の現実に戻る
 - e. 厳密に特定され、前もって構成される人間の世界というようなものはない
16. 日常性が含む問題を記述したものとして誤っているのは（ ）ことである。
- a. 反応が自動化され、意識しなくても知覚できる
 - b. 中央指向のゆえに、全体を見失わないで済む
 - c. 人間の死の問題などは真剣に考えないで済む
 - d. 少数者や障害者の視角が無視される
 - e. 実用的でない事物は中心的な関心事にならない

17. 聖と俗の区別、そして俗の自律化の事態とは（ ）と捉えることができる。
- 周辺の現実の視角から中央を指向すること
 - 日常生活と非日常的限定領域の間を彷徨すること
 - 長い歴史を通ってきて、神話が、社会集団に共有されること
 - 象徴的世界構築の営みを放棄すること
 - 現世主義者として、世俗の恩恵に浴すること
18. キップリングは、インドの密林の中で独り小屋に住んでいた森林監督官が「その孤独の中であって、自分自身への尊敬を失わないように」夕食毎に礼服を着用したという例を報告している。この例は（ ）を示しているといつてよい。
- アニミズム的呪術的慣習
 - 人間の営みが達成する客観的現実
 - 日常的には納得できない行為の法外性
 - 夢にも比すべき一人だけの世界
 - 安定した日常の常態とその自動化作用
19. 象徴的世界の意味と等しいものは（ ）である。
- 日常的経験と非日常的現実を統一する宇宙観
 - アニミズム的呪術的慣習の世界
 - 個人を超越する客観的現実の世界
 - 頭の切り替えや飛躍の経験による非現実観
 - マージナルな現実や周辺世界
20. イエスの「たとえ」は、（ ）といふことができる。
- 日常生活の匂いのするものが多く、日常生活の経験的現実に深く根差している
 - 多くの人々に対する博愛の心の大切さを主に教えている
 - 想像力を喚起することによって、常識を逸脱した神の愛を開示する
 - 常識に従うか、新しい可能性に身を投じるかの決断を直接問題にしている
 - 弱者に対する社会的差別を激しく批判するための虚構的表現である

21. 聖書において、その詩的また虚構的文学的言語は、()という役目を果たしているといえる。
- a. 唯一の神を神として至高の日常世界をも相対化する
 - b. 確立された日常の感覚を超えて、現実を揺さぶり否定する
 - c. 謎と危機と緊張をはらむ現実にも意味と規範を与える
 - d. その言葉に出会って意識が初めて明瞭に考えられるようにする
 - e. 法外性、誇張、逸脱などという境界表現を活用する
22. この論文に副題をつけるとしたら()が適切である。
- a. 日常言語と詩的言語
 - b. 人間世界とその構築
 - c. 中央指向と周辺の問題
 - d. 世俗化の克服
 - e. 想像力と聖書の言葉

II.以下の問い(23-32)はそれぞれ何らかの意味で関係のある二つの文章(1)および(2)から成りたっています。[(1)および(2)に先行してその説明文ないし、導入分が置かれている場合もあります。]これらについて最も適切と思うものを、次の a,b,c,d の四つの内から一つだけ選び、解答用カードの相当欄にある a,b,c,d のいずれかのわくの中を黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

- a. (1)、(2)とも正しい。
- b. (1)、(2)ともに誤りを含む。
- c. (1)は正しいが、(2)は誤りを含む。
- d. (1)は誤りを含むが、(2)は正しい。

23.「意識が意識として作動するには言葉が必要なのである。...しかし、その言葉もいわゆる日常・実用の言葉では、この場合は役に立たない」と本文で言われている。

- (1) 日常・実用の言葉は自動化され反射化されて日常性の一部を構成しており、文学の言語にはなりえない。
- (2) 日常・実用の言葉でない「もう一つの世界」はイメージを歪形することで、眼前にあるのでない、思いがけない空想的な現実を展開するものである。

24.

- (1) 人間にとって世界は今ある現実だけでなく、常に新しく構築し続けられなければならないものであるということが、「世界が開かれたもの」だという意味である。
- (2) 鼠や馬にとっては、鼠の世界、馬の世界というものしかなく、それ以外の世界などは存在しない。

25.

- (1) 人間にとって現実とは、人間自らの営みによって初めて構成されるべきものであり、この意味で前もって構成される人間の世界というものはない、と言える。
- (2) 人間は自分の世界を構築していく過程において、自分を成長させ、完成させるものである。その意味では成長した個人に先だって客観的な社会的現実が構成されている、と言える。

26. バーガーの表現に従えば、人間は自分が構築する「世界の中に自分を作り出す」ことになる。

- (1) ここで、自分が世界を構築するということが、社会化、内在化を意味する。
- (2) 世界があってそこに初めて自分も作り出されることは、現実の客体化を意味する。

27.

- (1) 象徴的世界は最もリアルな日常的世界と区別される。前者は神話、宗教などに代表されるように、想像力の所産であり、個人の考えに左右される主観的なものである。
- (2) 象徴的世界を構築する言語は単に情報を伝達するという身近な世界の実用性、実効性に向けられるのではなく、もっと広く深い人間の存在にかかわる問題に気付かせる。

28.

- (1) イエスのたとは、その筋の法外性が際立っている。このことは、イエスが「異化」の方法を積極的に活用し、世俗化に対してマージナルなものの現実性をありありと示したことによると考えられる。
- (2) イエスのたとえに用いられる素材は、日常生活の匂いのする、誰でもよく知っている事柄である。それがたとえとして成功しているのは、当然のこととして受け止められている日常の現実感覚とたとえが描き出す世界との鋭い緊張を示すことができたことによると考えられる。

29.

- (1) 人間にとっての現実である社会の構築は人間の生物学的体質に必然的に起因している。
- (2) 人間の生物学的資質は、他の動物のように特定し得るものを有さず、どのような世界が作り出されるかはあらかじめ定まっていない。

30.

- (1) 夢や遊びや信仰とかは現実に関係づけられるとすると、一般的に、日常世界の最もリアルな現実性を前提し、その部分として意味が与えられることが普通である。
- (2) 夢はマージナルな事柄であっても、人間世界の現実一般がそうであるように、人間が作り出す客観的現実であることを否定できない。

31.

- (1) 日常性の現実には没している生活においては、自動化作用によって毎日眼にしながらも現実がそれとして見えていないということがある。
- (2) イメージの歪形によって日常の中で確認できない事態を可能態として発見し、新しい現実を見いだすことができる。

32.

- (1) 日常世界の客観的現実には人間の働きにより成立し、集団の認識によって維持されている。
- (2) 日常世界の主観的現実には、ある個人が社会制度などの現実をそのまま社会集団の集合的な認識に沿って承認するというしかたで形成される。

参考文献

大江健三郎『小説の方法』1978年

ピーター・バーガー（藺田稔訳）『聖なる天蓋』1979年

ピーター・バーガー（荒井俊次訳）『天使のうわさ』1982年

ピーター・バーガー、トマス・ルックマン（山口節郎訳）『日常世界の構成』1977年

ポール・リクール、エーバーハルト・ユンゲル（麻生建、三浦國泰訳）『隠喩論』1987年